

巻頭言

「長いけれどとっても面白い道」

1996年3月、スペインの古都トレドで「Infrared Space Interferometry : Astrophysics & the Study of Earth-Like Planets」という研究会が開かれ、私は当時概算要求中であったIRIS計画(後のASTRO-Fさらに改め「あかり」)の紹介発表をするために参加した。

この研究会はヨーロッパ宇宙連合ESAとアメリカNASAの天文学推進担当者が連携して開いた研究会であり、太陽系外に地球型惑星を見つけて生命現象を発見するためには、宇宙に赤外線干渉計を打ち上げる必要があるというコンセプト(つまりDARWIN計画)について、研究者が議論を積み重ねるという趣旨であった(ようだ)。

当時の私の興味は主に銀河形成史、特に宇宙論的遠方の赤外線銀河の観測にあったため、「あかり」プロジェクトの立案・計画詳細化や遠赤外線装置の基礎開発に専心していたが、「あかり」の次には「宇宙空間に赤外線干渉計を実現したい」との希望を持っていたためにこの研究会に参加した。前年の51 Pegの発見については実はそれほど関心がなく、太陽系外の生命探査などという、とんでもない(あやしい?)研究が目の目を見るとは夢にも想像していなかった。

研究会ではフランスのAlan Leger達がDARWIN計画を紹介し、NASAからもロードマップが示され、このような動きを不勉強だった私にとっては驚きの連続であった。今思うとKastingもSchneiderもShaoも発表していた。研究会の最後にパネルディスカッションがあり、日本の宇宙研からの参加者ということでパネラーに引っ張りだされて「日本のロードマップ」を半ば強制的に紹介させられた。たしか関連するプロジェクトとして「はやぶさ」と「のぞみ」に加えて、私が考えていたスペース遠赤外線干渉計のアイデアを紹介し、結構好評だった記憶がある。

その後の13年間、太陽系外惑星研究の進展は特に地上からの観測、理論研究で目覚ましいものがあつた。遅ればせながらスペースでもCoRoTやKeplerが驚きの結果を出しつつある。とうとう岩石惑星も見つかった。次の10年間も研究が加速的に進展するに違いないが、あくまで次のゴール(マイルストーン)は「太陽系外の生命現象の発見」であり続けるだろう。研究人生をかけてこのゴールに向かって邁進する日本人研究者が何人も出てくることを願うし、私もその末席を汚したい。それだけの、いやはるかにそれ以上の価値があるゴールであることは間違いないと思う。しばらくはワクワクし続けられそうである。

芝井 広(大阪大学理学研究科)